

『いのち』を考える

第3回連続講座

～生きることの苦悩と喜び～

JR西日本あんしん社会財団は、平成24年度より、死や悲嘆、グリーフケアといったテーマはもとより、多様な観点から「いのち」に焦点を当て、ともに考える連続講座を開講しています。

①
5月8日(水)



青木 新門
作家、詩人

「いのちのバトンタッチ」
—映画「おくりびと」に寄せて

私はひよんなことから葬儀社に勤め、納棺専従社員として働いていたことがありました。そんな納棺の現場で死者たちから教わったことは「いのちのバトンタッチ」の大切さであった。そのことを納棺の現場体験や映画「おくりびと」の裏話などを交えてお話しさせて頂ければと思っています。

②
5月15日(水)



細谷 亮太
聖路加国際病院
小児総合医療センター長

子どものいのちの傍で

治らなかった時代から、8割ほどが治るようになった今日まで、小児がんの子ども達の傍にいて、さまざまな「いのち」に関わり、その周囲の人達とおつきあいをさせてもらって来た。そこから教えていただいたことは、人間に生まれてきてよかったという事。

③
5月22日(水)



伊藤 高章
桃山学院大学教授

「いのち」を聴く「アート」と「ハート」
—スピリチュアルケア教育の現場から

悲嘆のご経験をゆっくりとそして静かに受けとめる孤独な時を経て、今度はご自分がケアの提供者となろうと学びを続ける方々がいらっしゃいます。その教育にご一緒する機会をいただいています。ありのままの人と向きあう、ケアアートの養いです。

④
5月29日(水)



田村 恵子
淀川キリスト教病院看護部主任課長、
がん看護専門看護師

「いのち」に向き合う
—生と死の境界を越えて—

いつかは死すべき私たちが死との対峙を余儀なくされたとき、死から生をまなざし、弱さの中しなやかにさを身につけて、人が最期の瞬間まで生き抜くことについて、ケアの視点からご紹介します。ケアの実際を理解していただくことを通して、死をも視座においてく<私>が生きることをご一緒に考えてみましょう。

⑤
6月5日(水)



田中 幸子
「全国自死遺族連絡会」世話人

悲しみは愛しさと共に

自死遺族として自助グループ活動をなぜ広げてきたのか、そして子供を亡くした親の会を通じて、震災の遺族の自助活動支援を見てきてきたこと、大切な家族の死への悲しみは愛しさとともにあり、悲しみは愛であり、だからこそ悲しみには力があることを知っていたいただきたいと願っています。

⑥
6月12日(水)



大井 玄
東京大学名誉教授

「お迎え現象」と
つながりの心理

「お迎え現象」は、終末期にある人がすでに亡くなった親しい人と会う現象である。この現象は霊魂の存在から解釈することも、脳の認識機能から説明することも可能に見えるが、いずれにせよ、その中核には「つながりの心理」が働いているように見える。つながることにより私たちは安堵するのである。

⑦
6月19日(水)



島 蘭 進
東京大学教授

日本人の死生観と無常観

仏教は無常を知り仏道に心向けられることを教えてきた。それはまた美意識にも浸透し、桜はいのちのはかなさを思わせるが故にこそ歌い続けられてきた。こうした日本人の死生観がどのように変化して現在に至っているのか、ともに考えていきたい。

⑧
6月26日(水)



河邊 貴子
聖心女子大学教授

愛する命を送るとき
～「河辺家のホスピス絵日記」より～

末期がんの夫はホスピスで最期の時を迎えました。がんが発見された時の思い、再発したときの落ち込み、共に歩んだ家族として、そのときどきに何を感じ、どう支えあったのか。また、私たちが受けたホスピスケアとはどんなものだったのか。体験を語りたいと思います。

⑨
7月3日(水)



柏木 哲夫
金城学院学院長、
淀川キリスト教病院名誉ホスピス長

いのちに寄りそうケア

病氣や災害で困っている人を「支える」という。支えるは、下からである。支えなければその人は落ちるという気持ちがある。「寄りそう」は横からである。寄りさえすれば、その人は前に進むという信頼感がある。いのちに寄りそうことについて考えてみたい。

⑩
7月10日(水)



水谷 修
花園大学客員教授、
関西大学客員教授

夜回り先生、いのちの授業

今、多くの人たち、子どもたちが、明日を夢みることができず、苦しんでいます。リストカットや鬱病、自死にいたる方もたくさんいます。その背景と解決方法を、お話しさせていただきます。

撮影：疋田 千里